

野村克也急死のニュース捕手の如き編集者われ哀しみ止まず  
晋樹隆彦

大学を出て最初に就職したのがたしか銀行関係の雑誌の編集部だった作者。以来、今日までずっと編集者として生きてきた作者ならではの一首と思う。野球における捕手の役割が、投手の能力や個性を最大限に引き出すことにあるのと同じように、編集者と著者の関係はある。ただ、表現として、「捕手のごとき編集者われ」は、事情を知らない読者には、一読分かりにくいかも知れない。

ふたつとはやさしい響き 蝶の羽、野ねずみの耳、君の手のひら  
清水あかね

上二句、アフォリズム風の出だしだが、三種の名詞の適度な意外性が読者を楽しませてくれる。人間をはじめ動物たちはたくさん対になっている器官を身につけている。中には二対とか四対の器官もあるが、羽や耳や手など、一対ずつの器官も少なくないことをあらためて認識させられる。

サッポロ一番味噌ラーメンの三分の余生に蓋をして生きる夜  
帖佐光浩

カップ・ラーメンを題材にしつつ、「三分の余生」という八音を入れることで、一気にユーモアの歌として展開させた気合いに感心した。なかなか切れ味のいい感覚と思う。

「年賀状今年を最後にいたします」文案作る父の代わりに  
伊藤亜佐里

作者は文案だけを作って、文字は父上が書かれるのだ

## 短歌の現在

### No.468 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

ろう。高齢の父のさびしい思いをトレースするさびしさ。引用のカッコをうまく使って一首をまとめている。

「哲久」の富来の敵門冬波はしじにしどろに愈りはなく  
中島君夫

哲久は言うまでもなく歌人・坪野哲久。富来そして敵門は石川県羽咋郡の地名である。地図で見てもらえば分かるが、能登半島の西側の中ほどである。この一首、人名、地名以外は冬の波についてだけ表現している。人名・地名に語らせて、あとは寡黙な短歌と言っている。短歌の音楽が聞こえるような工夫がなされている。私はい時、坪野さんとかかなり親しくつきあっていたとき、お宅にも何度かうかがい、何度も酒をご馳走になった。久々に坪野さんを思い出した。また、一度たずねたことがある日本海の荒波寄せる敵門を思い出した。なお、哲久にカッコは不要だった。

古伊万里の鶴文様の大き皿明石の鯛は小ぶりが相応  
う  
蔵田道子

皿に載せる鯛があまり大きいとせつかくの鶴の絵がかくれてしまう。鯛を出したことで、鶴の絵の華麗さを読者にイメージさせる一首になった。

足早に歩きまわりて食事する白鶴鶴はわれを恐れず  
月丘ナイル

ハクセキレイは多摩川の河原などでもよく見かける。これを書いている今朝も、テオの散歩のときに、足早に歩きまわっているのを見かけた。「われを恐れず」が、